

## 『日本地質学会題 112 年学術大会(京都)見学旅行案内書』の欠落部分について

同案内書の 66 ページから 68 ページには、F 班(白亜紀巨大琵琶湖コールドロン)の Stop4, 5, 6 の説明が掲載されるはずでしたが、編集段階で Stop4 の途中から Stop5 の途中まで、約 800 字分の欠落が生じてしまいました。編集者として、読者および著者の沢田順弘氏・中野聰志氏にお詫びします。欠落部分を含む Stop4 と 5 の説明文を本ニュース誌に掲載しますので、案内書と併せて読まれるようお願いいたします。

(実行委員会見学旅行担当：山路 敦)

### Stop 4 栗東市阿星山南西林道

本地域では、観音寺花崗閃緑岩に田上花崗岩の細～中粒斑状相が貫入し、さらにこれらに複数の花崗斑岩脈が貫入している。局所的に、丹波帯の堆積岩がルーフ状に残存している。本地点の産出岩石とその産状は、周琵琶湖花崗岩団体研究グループ(2000)、西橋ほか(2001)と中野・原山(2003)によって詳しく記載されている(第 10 図)。

本地点では、石英斑岩及び火砕岩が、田上花崗岩体の細～中粒斑状黒雲母花崗岩に捕獲岩体として産する。さらに、両者の境界付近に花崗斑岩が貫入している。火砕岩は熱変成作用を受けているが、肉眼的に火砕岩としての組織が認められる(第 11 図 a, b)。この火砕岩と同じく熱変成をうけている石英斑岩は密接な随伴関係を有しているが、石英斑岩が圧倒的に多い。火砕岩は多くの場合、石英斑岩に脈状に貫入し、また、石英斑岩を角礫状やレンズ状～ひも状に捕獲していることもある。石英斑岩は灰色から淡青色を呈し、火砕岩は暗灰色である。また、この捕獲岩体中には多数の堆積岩起源の異質岩片が含まれている。

本地点以外にも、石英斑岩・火砕岩の岩脈が複数確認されており、中には鏡下で典型的な火砕岩組織が確認できるものがある(周琵琶湖花崗岩団体研究グループ, 2000; 西橋ほか, 2001; 中野・原山, 2003)。

### Stop 5 湖南市甲西町甲賀カントリークラブ付近

カントリークラブ付近では、田上岩体の細粒斑状黒雲母花崗岩が分布しており、領家帯新期花崗岩に対比される観音寺花崗閃緑岩に貫入している(第 8 図)。両者の境界部からわずかに南側に離れたところに、細粒花崗岩に包まれ、粗粒

黒雲母花崗岩が分布している。両花崗岩は、接触部付近ではいずれも熱水変質を受けて黒雲母が消失している。この変質花崗岩は、1974-1984 年にわたり東山鉾山(長石鉾山)として採掘されていた(高木・小村, 2003)。

#### 細粒斑状黒雲母花崗岩

本岩相は、田上花崗岩体の天井部を占める。部分的に粒度変化があり、不均一な岩相である。天井相に発達するこのような岩相は、比叡岩体を除く琵琶湖南部周辺の各花崗岩体に共通に見られるものである(周琵琶湖花崗岩団体研究グループ, 2000)。本花崗岩も、石原ほか(2005)により、詳細な全岩化学組成データが公表されている(第 1 表)。

#### 観音寺花崗閃緑岩

新期領家花崗岩に属するとされている本岩は、栗東市金勝山・観音寺～湖南市甲西町三雲～甲賀市甲南町下磯尾にかけて、幅 1-2 km で、帯状に湾曲し、特異な産状を示す。田上花崗岩の貫入により接触変成作用を受けており、その影響は特に甲南町市之瀬北や大津市大鳥居北で明瞭である。岩相変化が認められ、モード組成上は花崗閃緑岩質～トータル岩質のものが多いが、一部花崗岩質のものもある。田上花崗岩との境界部では、有色鉱物のフォリエーションや変形破碎構造が観察される。同じく岩体周辺部では、熱水変質作用も認められる。場所により、アルカリ長石の斑晶を有し、弱斑状となっているが、岩体周辺ではアルカリ長石が長径 3 cm に達している場合がある。色指数は 8-20 まで変化し、角閃石がほとんどないものから、3% 程度含まれるものまでである。本 Stop 付近のものは、花崗閃緑岩質である。

(沢田順弘・中野聰志)